青雲

せいうん

大分大学大学院 経済学研究科 同窓会誌

四極青雲会

第九号

目　次

タロック教授の思い出…… 内野　順雄　2
大分大学に赴任して…… 林　　勇貴　〃
社会人から教員になって…… 金子　　創　3
令和２年の抱負…… 衛藤　晟一　〃
不思議な縁・人との出会い…… 李　　研研　4
東京オリンピックの気配を感じながら…… 桜井　礼子　〃
大学教育のいま…… 原田　善教　5
春は名のみの　風の寒さや…… 初瀬　克己　〃
海外視察の見聞…… 菊川　敬規　6
どうぞご安全に！…… 筒井伊智子　〃
別府ツーリズムバレー構想～宇野稔先生を偲んで～…… 奥　　茂夫　〃
「すぐ役に立たない」地の淵源を求めて…… 工藤　将之　7
大分を離れて20年後の今 …… 越智　信仁　〃
2019年ラグビーW杯 …… 宮崎　省三　8
皆様のおかげで…… 甲斐　正教　9
妻のこと…… 辻　美貴善　10
ふるさとは、いつも我が心の中に…… 古庄　恵子　10
「親と子」雑感…… 植松　修一　11
本当に大切なこと…… 後藤　賢吾　〃
同窓会のあり方について…… 長野真一郎　12
地方創生への問いと大学院での学び…… 松井　督治　〃
第９回　総会・記念講演および懇親会…… 事　務　局　13
第17回　定例会―イノベーティブ経済セミナーとして大分大学と共催― 事　務　局　16
第18回　定例会―イノベーティブ経済セミナーとして大分大学と共催― 事　務　局　17
新院生のご紹介…… 事　務　局　19
大分大学経済学部創立100周年に向けて募金にご協力を … 事　務　局　〃
編集雑感…… 掘　　誠　21

タロック教授の思い出

大分大学名誉教授
内野　順雄

40年前の話で恐縮だがタロック教授とのエピソードを記してみよう。

ヴァージニア工科大学公共選択研究センターに訪問研究員として4か月滞在し日常的に接触したのはブキャナン教授よりもタロック教授だった。昼食時になるとドイツから来ていたヴァン・リットさんと一緒にピックアップの車で大学近郊のピザハウスやレストランに連れて行ってくださった。時には学内の食堂でのノーベル賞受賞者（理系）のランチョンミーティングに同席させてもらったこともある。内容は皆目分からなかったが。彼は博覧強記で色々なことに詳しかった。何しろ「ウオーキング・エンサイクロペディア」を自他共に認めていた御仁だったのである。タロック教授は朝一番に図書館へゆきそこで最新の情報を仕入れてから研究室へ来られる。シカゴ大学のロースクールを出て弁護士資格があり時には裁判にも行って来られて裁判はまさにサーカスの綱渡りのようだと言っておられたことを覚えている。

2年後の1981年8月学会出席のため来日され11日大分へ来られた。空港へ迎えに行き西鉄グランドホテル（当時）へお連れした。翌日別府の地獄めぐりや鶴見岳ロープウェーへ案内しやまなみを経て阿蘇山に行き熊本空港から東京へ見送った。

タロック教授はブキャナン教授と共に公共選択理論を発展させられたことで有名である。そもそも政治家にせよ官僚にせよ公僕として行動するものと考えられているが、実際には利己的なマインドによって行動していることを公共選択理論は明らかにしている。

タロック教授は官僚制、民主制における意思決定論などについてそれまで多くの人がとりあげなかった視点から真実を明らかにされた。例えばレントシーキング（rent seeking）という概念がある。それは民間企業が政府や官僚機構へ働きかけて法制度や政策を自らの有利な方向に変更を行うためにPR活動やロビー活動を行う。それによって超過利潤（rent）を求めることができる。一方官僚側にも政策実行の容易さを図るため様々な配慮をするであろう。ひいては自らのキャリアの発展を目指すことにもなる。それはわれわれがしばしば見聞していることではなかろうか。これらの実情に理論的な解明と政策的な示唆を与えられたのがタロック教授である。

もし利己心をベースにした公共選択論への細やかな私見を述べるとすれば利他主義的な行動が利己主義の結果がもたらす弊害を緩和するような仕組みが心理学的には実証されているとされており公共選択理論がそのような方向にも発展すればよいのではないかと考えている。

1986年ブキャナン教授はノーベル経済学賞を受賞されたが共同研究者ともいうべきタロック教授が選ばれなかったのは惜しみて余りある気がする。しかし政治経済学の分野で多大の貢献をされた功績は消えることはない。教授は2014年11月3日アイオワ州デモインにて死去された。92歳であった。

大分大学に赴任して

大分大学経済学部経済学科
准教授　林　勇貴

青雲会の皆様、はじめまして。私は2017年4月から大分大学経済学部とのご縁をいただき、財政学の分野で研究と教育を行ってきました。私がこれまで研究対象としてきた博物館などの様々な公共事業は、近年の厳しい社会経済状況において、地方でのあり方が問われており、様々な議論がなされております。また同時に、国や多くの地方自治体は地方再生に向けて様々な政策に取り組んでいます。しかし、いずれもなかなか成果に結びつかず、ますます地方の状況が悪くなっています。その理由のひとつとして、国や自治体による地域政策がエビデンス（科学的根拠）に基づいていないことが挙げられます。特に公共事業は、金銭的な効果だけではなく、目に見えない効果をもたらすことから、エビデンスに基づく政策判断が難しいとされています。私の研究対象のひとつである博物館を検証すると、ある自治体の市立博物館には金銭的な効果以外にも、街のシンボルになったり、将来世代に遺したいといった目に見えない効果があることが分かりました。このような目に見えない価値を持つ博物館を目に見える金銭的な価値（例えば、入館料収入や入場者数）だけで評価して良いのか、様々な方法を用いて評価することによって政策のあり方を考えるべきではないかという問題意識を持ちながら、日々、研究や教育をしています。

私は3年前に生まれ育った兵庫県を出て、大分大学に赴任しました。大分県に訪れ、まず感じたことはOPAMなどの文化施設や街なかのアートスペース、そして様々な伝統行事など、文化的な環境がとても整っているということです。今後ますます厳しい財政状況になる中、こ

のような文化的環境をこれからどのように活かし、どのように維持していくのか、そして、他の公共事業においても、いかに地方再生や持続可能な社会の実現に活かしていくのか、ご縁のあった大分でこれからも考え、発信していきたいと思います。

社会人から教員になって

大分大学経済学部
社会イノベーション学科
准教授　金子　創

大分大学には、２０１７年の社会イノベーション学科の新設に合わせて着任しました。大学院では、主に経済思想の歴史などの科目を担当しています。

さて、私の所属する社会イノベーション学科は課題探求型学習を謳っており、カリキュラム上ではアクティブ・ラーニング形式で進める授業を必修科目としています。学習者の間で特定の社会的課題を共有し、それぞれの持つ知見を積極的に出し合い、解決策の提案に結びつけるまでの実践的な学びをコンセプトとしているわけです。

こうした方針にもとづく教育は、私がこれまでのアカデミックキャリアの中で（受ける側としても受け持つ側としても）経験した伝統的な講義形式とは大きく異なるもので、若干の戸惑いと自身の適性に懐疑を覚えるところですが、学生とともに試行錯誤を重ねながら取り組んでいます。

伝統的な教授法であれ、獲得される知識は適切に活用されれば個別具体的な課題の解決にも資するものであると思われますが、その「知識を適切に活用」という部分は往々にして学習者のセンスに依存せざるをえません。上記の教育方針は、そうした伝統的な教授法でフォローが不十分な点を補完することと、社会的実践に結びつくことが期待されます。

近年の計算機科学やデータサイエンスの発展などに象徴されるように、適切に定義された課題を解決するためのツールは誰でも容易にアクセスできる時代情勢になっています。そのため、課題を適切に定義するところから始める思考様式の重要性が相対的に高まっており、教育のあり方もまたそうした情勢に合わせてアップデートしていく必要性を日々感じています。いみじくも、私にとっての教育上の課題を解決することが社会的実践そのものであり、これらを皆さまと共に実りある取組みにしていけたらと思う次第です。

令和２年の抱負

内閣府特命担当大臣
参議院議員
（大18回生）　衛藤　晟一

青雲会の皆様方におかれましては、ご健勝にてご活躍の事と拝察申し上げます。日頃より、衛藤晟一にご支援・ご協力を賜っておりますことに心より感謝し御礼を申し上げます。

昨年は統一地方選挙・参議院選挙と大きな選挙がありご迷惑をお掛け致したことと思いますが、晴れて参議院三期目の当選を果たすことができました。

その後、９月11日に晴れて大臣就任ということとなりました。

担当は、一億総活躍担当・沖縄北方担当・内閣府特命担当大臣（少子化対策・領土問題・海洋政策・消費者食品安全対策）です。

各省庁において特別な部分を特命にて担当することとなり課題山積の中大変な役を仰せつかりました。就任以来３か月を過ぎ、大変な中にも道筋をつけるべく奮闘中です。

国外に目を向けると米中が米ソ冷戦のような形になる可能性を秘めている。日本としてどう生き抜くのか新しいステージに入ると思います。

国内的には、担当分野でもありますが国難ともいうべき少子化対策を早急に練らねばなりません。個人的には８月までにその骨格をまとめ年末の予算編成に向けて大変な作業ではあるが真剣に取り組んでいきたいと思っています。

また、防災・減災に伴う国土強靭化、地方創生を活発に推進していかないといけない。東京をはじめとした大都市圏と比べるとまだまだ地方は活性化できていない。

今年は、令和２年。令和は「うるわし」という意味で、長く皆で力を合わせて頑張っていく年であるということで、今年の目標文字を「和」とさせて頂きました。

今は、大臣として力を結集して、仲良くこなし、与えられた仕事を一つ一つ確実に成就させていきたいと思っています。重き荷は背負ったとしても、前向きに、ひたすら努力は惜しまぬように頑張っていきます。

結びに、本年が青雲会の皆様方に取りまして素晴らしい年となりますように心よりご祈念申し上げ年頭の祝辞と致します。

出典：内閣府HP（httpvs://www.cao.go.jp/notice/rule.html）

不思議な縁・人との出会い

経済学研究科博士前期課程在籍
現役院生　李　妍妍

中国・江漢大学時代には留学のことを全く考えていなかった私にとって、大分に来たことは偶然、あるいは「縁」だったかもしれません。

日本には一年半前に交換留学生として来ました。日本語学科の学生だった私は、日本語で会話することはできたものの、日本の日常や習慣などについてはよく知りませんでしたので、来た当初は大変でした。例えば、日本のコンビニで初めてお弁当を買った時、店員が「温めますか？」と聞きいてきました。私は温めてもらいたかったので、自信をもって「いいです！」と答えたのですが、温めてもらえませんでした。二回目の時に私は、「はい、大丈夫です！」と答えましたが、やはり温めてくれませんでした。テキストで勉強した日本語と日常生活の日本語は全然違うのだということを、この時初めて知りました。今は冗談として言えますが、当時の私にとっては、”一から勉強！“の辛さでした。

渡邊ゼミとガストロノミーウォーキング in おおいた安心院
（右から三人目が筆者）

この一年半の間、留学生活で得られた大事なことは”人との出会い“です。日本とドイツの友達ができました。お互いに日本語と英語を使って会話をしているので、時々誤解も生じますが、様々な文化に触れることができるので楽しいです。他にも、大分中文学園との出会いもありました。友人の紹介で、その学園での教師という立場になりました。日本の家庭で生まれ育っている子供たちに中国語を教える仕事です。外国人教師として、日本語の説明が難しいところは時々ありますが、それでも、生徒たちは理解しようとがんばってくれるのでありがたいです。毎週、生徒たちが楽しんで私の授業を受けてくれたら嬉しいなあという気持ちで授業の準備をしています。これからも、一緒に楽しい勉強時間を過ごせたらいいなと考えています。私の授業が、生徒たちの人生にとっていい思い出になれば幸せです。そして、十年後、二十年後に、私から習った中国語が少しでも役に立ってくれるならありがたいです。

日本での留学生活は、私の人生にとっては”宝物“です。これまでの人との出会いを大切にしながら、自分の人生もこれまで以上にがんばっていきたいです！

東京オリンピックの気配を感じながら

東京医療保健大学
東が丘立川看護学部
23回生　桜井　礼子

大分の地を離れ、東京に来て5年目となりました。現在勤務している大学のキャンパスは、東京都立川市にあります。昭和記念公園があり緑の多い地域ですが、都心とは3度くらいの気温差があります。今年の冬はいつになく暖かく、コートを着て出勤しても、途中でコートを脱ぎたくなるくらい暖かい日があります。

さて、２０２０年はオリンピックイヤーです。新国立競技場が完成し、オリンピックの観戦チケットが話題になったり、これから聖火が各地を巡り、全国での盛り上がるのかなと思ったり。日々の生活の中で変化を感じるのは、外国の方の多さに比例して、駅など様々な表示が日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語が増えて、駅の構内のアナウンスも日本語以外の言葉がとびかいます。時として、日本語のアナウンスはと、つい聞き耳をたててしまいます。

多くの人々が集う東京や各地の競技会場では、7月～8月のオリンピック開催まで、どのような変化があり、どんな出会いがあるのか、わくわくします。その反面、オリンピックが終わった後の東京がどのようになっているのか、まったく想像ができず、不安でもあります。

さて、写真を1枚と言われたので、今年は鼠年ですが、我が家の愛猫”あい“を皆様にご紹介いたします。大分の地で出会い、今年で推定21歳になります。動物も長寿となり、家猫の平均寿命は約15歳、犬よりも猫の方が少し長生きとの調査を目にしました。うちの”あい“も加齢にともなって、高血圧で降圧剤、心臓の薬、消化剤、足腰が弱くなってサプリメントなど、人間と同じ薬をほんの少量ずつ飲んでいます。

とはいってもやはり生き物には寿命があるもの、一喜一憂の毎日ですが、ご飯を食べて、すやすや眠っている”あい“をみるのが、私の心休まる時間です。

また、同窓会の皆さまにお会いできる機会があることを願っております。

大学教育のいま

学校法人東北学院常任理事
東北学院大学副学長 経済学部教授
4回生　原田　善教

少子化の時代を迎え、教育界には厳しい時代となっている。また、バブル崩壊以来の日本経済の低迷の中で企業における社内教育の余裕のなさ（劣化）が明らかとなるにつれて、大学教育に対する社会の風当たりが強くなってきたのが、平成の30年間であったように思われる。思い起こすと、高等教育の大衆化に伴って大学の幼稚園化とか、大学1年生は小学校13年生だとか言われてきた。企業の経営者たちは「いまどきの学生は使えない、もっと大学では教育をしっかりやれ！」と言うが、自分たちの学生時代のことを思い起こしたことがあるのだろうか。

大学進学率が50％を越え（2019年、54・67％）、エリート型からユニバーサル型の大学が当たり前となった時代に、社会における大卒人材の役割が大きく変化してきた。現代のように変化が激しく予測できない社会において大学教育が目指すものは、生涯学び続けられる人を育成することにほかならない。とすれば、これまでの受動的な学びを主体的・能動的なものに変えていくことが求められることになる。それがアクティブラーニングであり課題解決型学習でもある。これらは従前から文理を問わず大学教育において「演習」として行われてきたものである。その意味では、目新しいものではなく従来の対話型学習＝「演習」の充実・強化こそが、いまの大学教育に必要とされているのである。

とはいえ、いまどきの大学生の国語力の劣化は著しい。国立情報学研究所の新井紀子教授は、「国語は『国語』であるがゆえに、自然に身につくと侮った私たち大人の怠慢こそが責められるべき」と述べている（『朝日新聞』2020年1月10日）。私も、これまで初年次演習から4年次演習までたくさんのものを書かせ添削・返却してきた。こうした繰り返しの訓練の積み重ねでしか、国語力の向上は図れない。このことを演習において実践していくことによって、国語力の向上とともに主体的に学ぶ力が身に付いていくのではないかと考えている。

春は名のみの　風の寒さや

初瀬克己税理士
行政書士事務所 代表
17回生　初瀬　克己

石走る垂水の上のさわらびが萌え出ずる頃となりました。皆様におかれましてはうららかなりし芽吹きの春をお迎えのこととお喜び申し上げます。

私は学部生時代、宇野稔先生（商法）のゼミに所属しておりましたが、宇野先生がテキサス大学に留学されましたので、修士課程は香村光雄先生（会計学）のゼミを受験させていただきました。

香村先生は『現代企業会計と証券市場』（同文舘出版）で昭和63年11月3日、日本の社会科学の分野で最も権威のある日経・経済図書文化賞を受賞。

それは例えば、減価償却方法を定率法から定額法へ変更した場合の株価変動をデータに集め、財務会計が社会においてどのような機能を果たしているかという研究でございました。

会計学がそれまで「・・・であるべき」という演繹論であったところ、実証研究を初めて日本にもたらした恩師香村先生。日本最先端の香村ゼミ初の大学院生ということもございまして、当時厳しかった経営学の大谷先生からも過大評価を賜り家庭教師先の斡旋をいただく等幸運にも恵まれました。

学生時代はラグビー部主将として
自称大活躍。中央のタックラーが初瀬。

会計は測定伝達という目的達成のための技術で、その目的達成のための仕組み（企業会計原則等）作りが必要。そしてそれがどのような機能（作用）を果たしているのか？ また学術書には記述のなかった「会計の限界（企業の技術力等は決算書には反映されないなど）」についてもご教授いただきました。

「修士論文は、英語文献の引用が必須」と沢山のノルマが課され、一般英語辞書と会計学専門英語辞典が手放せなかった二年間。香村先生奥様手製の日本料理からビーフストロガノフ等国際色豊かなそれをもお振舞いいただきながら、どうにか論文を書き上げて無事卒業。

在学中は「問題が与えられる学習は高校まで。大学からは新たな問題を見出し、その答えを発信する＝論文」ともご教授いただきました。

ＡＩにとって代わられる職業などがマスコミを賑せております昨今、ＡＩの限界は「新たな問題を見出し、その答えを発信する」ことではないでしょうか？もしＡＩにこれが可能ならば、組織経営から経世済民までもがうららかなりし春にございます。

私の場合、その卒業から25年。人間五十年の下天の内をくらべましてサラリーマン税理士から独立開業致しましたのが昨年の春。ひねもすのたりのたりと気楽にお山の大将をやる所存でございました。しかしながら、見出すまでもなく、経営上の問題は芽吹く一方でございまして・・・萌え出ずる春はまだまだ先のことと見つけたりの令和二年の春でございます。

海外視察の見聞

菊川税務会計事務所代表
22回生　菊川　敬規

ここ数年、頻繁に海外視察をしています。

シンガポール、フィリピン、ドバイ、タイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジア、マレーシア、台湾と視察してきました。

海外視察では、現地の日系企業、現地のJETRO事務所、法律事務所・会計事務所、不動産屋、金融機関などを訪問しお話しを伺います。

度々海外を視察してみて、アセアン諸国の昔の発展途上国のイメージはなくなりました。所得格差はまだありますが、各国とも中間層が増えてきています。外から日本を見ると、経済のライフサイクル、国としてのライフサイクルが成熟期を過ぎ、日本は衰退期に入ってきているように感じます。

バンコクやホーチミン、クアラルンプール、マニラなどの都市における熱気は凄いです。

日本のバブル時代を彷彿とさせる印象ですね。首都圏を離れると依然のんびりとした時間を感じるのですが、首都圏の活気は溢れんばかりです。

法令の整備もされています。カンボジア、ラオスは、日弁連とJICAとの法整備支援共同プロジェクトにより日本の民法を土台にした民法典が施行されました。

タイとベトナムは、人口ボーナス期が終わり少子高齢化が急速に進みます。これからフィリピン、インドネシアが人口ボーナス期を迎え経済的に急成長することが予想されます。人口ピラミッドも綺麗な正三角形です。マニラのショッピングモールでは若者ばかりで高齢者は全くみかけませんでした。

ただし、未だに警察官、税務職員、税関職員などによるワイロの文化は依然としてあります。昔より少なくなってはきていますが、タイではワイロを拒むと許認可で報復されたり、ビジネス上の不都合が生じるので、その辺りの理解は必須です。

今後の日本では、外国人労働者が爆発的に増えてきます。私も日本と海外を結ぶ懸け橋のような仕事を創っていきたいと思うこの頃です。

どうぞご安全に！

行政書士法人畠山事務所
業務推進部　庶務課
18回生　筒井　伊智子

創刊号に記事を掲載させていただいてから早くも二巡目を掲載させて頂く事になりました。その間、毎号拝読させていただき皆様の幅広いご活躍、ますますの御発展に大いに感銘を受けております。

前回掲載時に勤めておりました不動産鑑定事務所は代表の病気により廃業となり約15年間にわたる勤務を終えました。

現在は千葉市にある行政書士法人畠山事務所業務推進部に所属しております。本所にて建設業許可申請、経営事項審査、経営分析、入札参加願、建設キャリアアップシステム登録、宅地建物取引業免許、建築士事務所登録、産業廃棄物収集運搬業許可、会社設立、本店移転、各変更議事録作成等の業務に関わっております。

今年開催される東京オリンピック・パラリンピックではいくつかの競技が千葉県内での開催が予定されており、昨年は建設業界の需要が多く、経営事項審査・千葉県電子入札の業務に追われておりました。9月9日未明に上陸した大型台風15号により、県内は数ヶ月にわたる停電・断水、冠水や電柱の倒壊、膨大な数の住家損壊など広範囲で大きな被害を受けました。当日、私は経営審査事項の予約が入っていたため職場に向かいましたが、普段通っている道が倒木のため数箇所通行止めとなっており、迂回しながら日頃の3倍時間がかかりました。しかし台風の影響で県庁側の担当者が出勤できず延期となってしまいました。その後も台風19号と台風21号に伴う大雨が連続で起こり、折しも令和2・3年度の千葉県電子入札時期に被ってしまい、お客様も当方も大きな不安を抱えましたが、11月末の締切期限まで無事に完了しました。

全国からのご厚意のお陰で千葉県内に復興の道筋が整って参りましたことを感謝申し上げます。今後は微力ながら御恩をお返しできるよう地元の防災メンバーの一員として一歩ずつ持続して貢献していきたいと存じます。

別府ツーリズムバレー構想
～宇野稔先生を偲んで～

別府市役所　産業政策課長
20回生　奥　茂夫

大分大学大学院を修了してから早21年が過ぎ去りました。

私は、現在、別府市役所の産業政策課にて、起業創業、人材育成、人と企業とのつながりを中心に観光産業を盛り上げる仕組み「別府ツーリズムバレー構想」の策定を進めています。（「ツーリズムバレー」とは「ツーリズム」と「シリコンバレー」を掛け合わせた造語です）

別府には8千人以上の学生が在籍し、中でも留学生は約90か国から約3千人が在籍しています。国内外から優秀な人財が集まっているのに、卒業後に別府に留まる人が少ないことが特徴としてあります。このような若い方が生涯にわたり別府とつながり、関わりをもってもらうことで、別府の観光産業に新たな風を吹き起こし、絶えず別府の観光産業が盛り上がる仕組みを構築することを目指しています。

別府は歴史のある温泉地ですが、新しいもの、異質なものを受け入れる土壌があります。先が見通せない不確定な時代だからこそ、別府にある豊富な資源・強みを活かした取組みを行っていきたいと考えています。また、古くからあるものを違う視点から見て、別府の魅力を深堀りして磨き上げ、稼ぐ力につなげていきたいとも考えています。起業創業後5年以内に9割以上が消えてしまう状況から、伴走型で支援していく仕組みも大切です。大分大学及び大学院の皆さん、別府で起業創業を検討されている方はぜひ声をかけてくださいね。

ゼミの恩師である宇野稔先生には、商法（会社法）をはじめとした法解釈だけではなく、実態と法制度の乖離の問題点、法律による理論武装など多くを学びました。とにかく理論明快説得力抜群の「宇野節」に惚れ込んでいます。今でも私の大きな目標です。大変残念ながら平成25年2月にご逝去されました。宇野先生がご存命でしたら、今後の起業創業について酒を飲みながら語り合いたかったです。

「すぐ役に立たない」知の淵源を求めて

41回生　工藤　将之

あの時、市原宏一先生が声をかけくれなければ、私は本学に入学していなかった。青野篤先生が指導教員でなければ、途中で退学していたと思う。修論で副査を務めていただいた石井まこと先生と秋山智恵子先生の的確なコメントのお陰で論旨を明確にすることができた。大呂興平先生、久木元美琴先生の授業は、知的刺激に溢れていた。感謝しかない。

大学闘争の余燼が燻っていた一九七〇年代中頃、学生生活を送った。「『いちご白書』をもう一度」が流れていた「スト権スト」の頃である。授業は度々中断され、期末試験はレポートに切り替えられた。いつしかキャンパスから足が遠のき、神保町の古本屋街が「私の大学」になった。いつの日か機動隊の放水にも、活動家のシュプレヒコールにも遮られることなく、アルバイトからも解放されて学生生活をやり直してみたいと思ってきた。

「すぐ役に立つ本は直ぐ役に立たなくなる本である」と言う（『小泉信三全集第十四巻』〔文藝春秋〕二三四頁）。大学院で「すぐ役に立たない」知の回廊を彷徨ってみたかった。青野先生には、二年間にわたって一対一のゼミで指導していただいた。脱線しがちな私の報告にも付き合ってくださった。修論を書き始めてからは、春休みも夏休みも返上して指導していただいた。青野先生の憲法は、私に基礎法学の大切さを認識させるに十分であった。「すぐ役に立たない」かに見える基礎法学こそ利益衡量を根底で支える価値判断の基層を形成していることを学んだ。

条件が整えば、他大学に進学したい。「すぐ役に立たない」知の淵源を更に探究してみたい。二度ダウンしながらも、みたび立ち上がった柳済斗戦での輪島功一のように（沢木耕太郎『敗れざる者たち』〔文藝春秋〕二四六頁）、キーボードを叩き続ける熱情が我が身に存在する限り、倒れるまで闘い続けたい。

大分を離れて20年後の今

尚美学園大学教授　税理士
16回生　越智　信仁

日本銀行大分支店次長に赴任し、2001年から社会人大学院生として夜間に通学しましたが、それから早いもので20年近く経ちました。その間、東京に戻った後は他大学の博士課程を修了するなどして、2015年には31年間の日銀生活に自らピリオドを打ち、現在は埼玉川越の尚美学園大学（総合政策学部）で教鞭をとっています。振り返ると今の私の立ち位置は、大分での学びが原点にあります。

最近の活動としては、研究面で2018年に4冊目の単著『社会的共通資本の外部性制御と情報開示』（日本評論社）を上梓し、昨年、環境経営学会賞（学術貢献賞）を賜りました。実践面では、昨年6月に兼業で税理士開業登録を行い、10月には経済産業省から認定支援機関に選定されますとともに、関連した活動にも注力し始めました。教育面では、本務校での教務委員長職が2年を経過しまし

たほか、今春から大学院研究科長に就く予定です。

また、非常勤先（中央大学ビジネススクール〈大学院戦略経営研究科〉、明治大学会計専門職大学院、静岡県立大学、高崎経済大学）や、公立学校等への租税教育（東京税理士会活動）などで、財務会計、監査、税務など幅広い分野で経験を積ませてもらっています。私生活では、豊洲在住でもありTokyo2020オリンピックのボランティアに登録しており、今から楽しみです。

蛇足ですが、大分勤務以来、温泉巡りが趣味になっています。大分勤務時の毎週末は、別府や近隣の温泉地を家族で回っていましたが、別府の泉種の豊富さ、九重・久住の大自然、長湯の炭酸泉など、東京在住になってからは味わえない貴重な場所ばかりで、その希少価値が懐かしく思い返されます。家内・息子ともども相変わらず、大分、九州の根強いファンです。私も齢を重ねてきておりますが、ご縁がございましたら再び自然豊かな暮らしに戻りたいと希望しておりますので、機会がございましたら是非お声がけください。

2019年ラグビーW杯

宮崎呉服店
34回生　宮崎　省三

2019年、私にとっては忘れられない年になりました。

まさか大分でラグビーW杯が開催されるとは、まして世界有数のチームの本気の試合を間近で観るチャンスが訪れるとは、約30年前の私には想像すら出来なかったです。

日本中がラグビー一色になり、ご当地大分県でも欧米、南半球の皆さんが大挙して押し寄せる状況を予想していた人はかなり少ないでしょう。

W杯の大分県にもたらした経済効果は253億円との試算も出ました。

大分県にとっては、非常に良かったのではないでしょうか。

誘致の経緯は以下のようです。

1987年（昭和62年）に第1回大会が開催されて以降、開催地域はヨーロッパやオセアニア地区等、ラグビー強豪国での開催が続いており、2004年（平成16年）に初のアジア開催を目指して、日本ラグビーフットボール協会が第7回大会（2011年）での開催招致に乗り出しました。第7回大会の招致活動には敗れたものの、日本開催への評価は高く、第8回大会（2015年）・第9回大会（2019年）の開催を目指して、招致活動が進められました。2009年7月に正式に日本開催が承認されました。

日本での開催地12カ所に大分県が選ばれる前から大分県内での誘致の署名活動を始めました。

開催地として大分県が選ばれる5年前から別府市のキャンプ誘致にも関わってまいりました。私の大学時代の先輩で、元日本代表監督の向井昭吾先輩に別府市国際スポーツ大使を受けて頂きました。

環境整備として、まだ砂のグランドであった実相寺グランドの整備、ラグビーW杯の大会やキャンプ誘致の大分県民及び別府市民に向けての啓蒙活動。向井先輩にはこの5年間の間に度々別府を訪れて頂き、ご自身が日本代表の監督として行なった合宿地の選定基準や、W杯に向けての強化の中で、どのタイミングでどのような環境がなければいけないのかなどの助言を頂きました。

それをもとに別府市の関係者と、別府市ラグビー協会、商工会議所、各種青年団体などと共有して官民一体となって、活動してきました。

組み合わせが決まる前のキャンプ地の整備建設など、普段とはかなり違うギャンブルを別府市は仕掛けたように見えますが、実は緻密な部分もありました。

ある情報で4万人以上の観客席がない所には、ティア1（トップ10位以内のチーム）の試合は開催されないという情報がありました。

その仕様になっている開催地は九州では大分県のみです。西日本で唯一のスタジアムであり、必ずトップチームの試合

ウェールズの主力選手と別府市内で！

次男が試合前に旗を持って入場！！

は開催されるという確証と、開催2年前に環境がととのわなければ、誘致出来ないという助言にそって整備しました。芝の育成を含めるとフライング気味の整備をしないといけませんでした。対戦カードが決まってからの整備ではタイミングを逸するのです。

当時の別府市の副市長がラグビー経験者であったというのも良かったのだと思います。

結果的に、オールブラックス、オーストラリア、ウェールズ、フィジーの試合が組まれ、尚且つ準々決勝まで開催されるとは、予想以上の結果でした。

舞台は整い当日の受け入れに関してとなると、今まで経験をしたことがない状況が予想されました。

開催前この状況ではマズイ、そんな気持ちとなんとかしなければという勝手な使命感や開催期間中に日本人よりも外国人観光客の比率が多い中で、どんなおもてなしの対応可能なのか考えました。『4年に一回ではない一生に一度だ』であれば、別府の人間として『なんとかせんといけん』。そんな気持ちを地元のメンバーに伝えたら、自然発生的におもてなし村として、外国人対応、試合を観戦できる環境作り等をすることが急遽8月の後半に決まりました。

オールブラックスアーロンスミスと記念撮影

場所の選定としては、自社の店舗と軒下を活用しました。

それから開催まで連日連夜の会議。開催期間中の試合開催の日は毎日店舗を開けました。

お陰様で、今まで40年近くうちの店舗を営業していますが、これまでの外国人訪問客の30倍以上の外国人が店舗にやってきました。

そして、オールブラックスの選手も来店しました。

開催期間中にメディアにも沢山出演しました。

最近よく会う方には、ラグビーの時はよう見たよと言われます。本業のことは全く聞かれません‼

今、ラグビーW杯が閉幕した後のこのブームを次世代へ繋げることが出来てこのミッションが終了するのだと思います。皆さんにわかで大丈夫です。ラグビーの面白さを理解して、引続きラグビーに親しんでください。

賑わう店舗前

賑わう店舗前

長野別府市長を囲んで（本人左端）

皆様のおかげで

甲斐税理士
中小企業診断士事務所　職員
院24回生　甲斐　正教

私は、県外の大学卒業後、地元に戻り大分大学大学院に入学、そして修士課程卒業後は福岡で約15年生活し、再び大分に戻ってきたのが2年半前のことです。

15年もいましたので様々な気持ちを抱えて戻ってまいりましたが、大分に戻ってから、本当に周りの方々との縁や繋がり、温かさを感じることばかりで、日々皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

身内、高校までの繋がり、新しく繋がった方々もそうですが、大学院に関してもそうです。

院の2年間で当時出会った皆さんとも交流を持ち、創設時くらいしか参加できなかった四極青雲会にもほぼ毎回出席させていただき、たくさんの卒業生の方々といつも楽しくお話させていただいております。院の卒業年関係なく交流できるこの四極青雲会、とてもありがたいです。

また、違う大学卒なのに四極会にも参加させていただけるのもありがたいことです。四極会の若年層中心の四極昭平会と、四極会合同の会には、これまた出来得る限り出席させていただいております。青雲会も四極会も、ご先輩の方々からは面白いお話を聞けてたくさん勉強させていただき、同世代や年下世代の

方々からはとても刺激を受けます。
また、院の研究室は商法の宇野稔先生でしたが、残念ながら7年前にお亡くなりになりました。とても素敵な先生でした。字数自由ならもっとお話ししたいところです。亡くなられてからは先生のご自宅で、毎年正月とお盆に、奥様お子様方を囲って学部歴代のゼミ生達が集っており、先生に御参りしたあとは皆でワイワイお話をしていて、とても温かい会です。その中でも一番明るく聖母のようだった奥様も昨年末に亡くなられました。とても悲しいですが、きっとまたお子様方含め皆様で同じように繋がっていくのかと思います。
皆様にいただいてばかりでなく、私からもたくさんお渡しできるように、大分3年目、エネルギッシュに頑張りたいと思います。

和気あいあいの宇野ファミリー

妻のこと

九州運輸局福岡運輸支局
39回生　辻　美貴善

私は２０１５～２０１６年度にかけ大学院へ通い、無事２年で修了することが出来ました。当時を思い出すとまず妻のことが頭に浮かびます。今日は妻のことについて記したいと思います。
当時、私は37歳。妻は１つ下。そして子供は3歳（女の子）と1歳（男の子）の2人。子育ての一番大変な時期です。1歳の息子は、やっとつかまり立ちが出来るようになり、食事は離乳食。娘の方は、いわゆる「魔の3歳」と言われ、自我が出てきて思いっきり反抗的な時期です。
今思えばよくこんな時期に大学院入学を決め、妻も許してくれたと思います。毎日私は、17時の就業後、そのまま大学へ向かいます。帰ってくるのは22時過ぎ。その間、妻は、子供2人を1人でお風呂に入れます。不安定なつかまり立ちの息子は、溺れることに気を付けて、自分が身体を洗う時も一瞬たりとも目が離せません。一方で上の娘は好き勝手に水をバシャバシャ遊んでいます。お風呂が終われば、次は食事です。離乳食は別に作らなければならず、食べる時にはボロボロこぼし、あちらこちらがベタベタです。3歳の娘は、お箸の訓練中で直ぐに癇癪を起します。一番大変なのが、寝付かせです。2人の子供はなかなか寝付いてくれず、やっと1人が寝たと思っても、もう1人が泣き出し、寝ていた方も目を覚まし、振り出しに戻ります。深夜の夜泣きには、私と交代で臨みますが、私は仕事と学校の疲れでなかなか起きず、ほとんどを妻が寝付かせてくれます。
大学院時代は、好きなことを好きなだけ研究させて貰いました。今の仕事にも十分に役に立っています。しかし、無事に修了できたのは妻の支えがあったからこそだと思います。ここに寄稿するにあたり、改めて当時を思い出させてくれました。妻は今となっては「a piece of cake（些細なこと）」と言ってくれます。妻に心から感謝。今日はcakeを買って帰ろう。

ふるさとは、いつも我が心の中に

主婦
32回生　古庄　恵子

年を重ねる度に、一層鮮やかに心の中に広がる光景がある。それは、私の記憶に焼きついた、子供の頃のふるさと佐伯の町並みであり、美しい山や川や海の景色であり、懐かしい人々と過ごした日常の何気ない場面である。
その時々で、心の中に広がる光景は様々だが、それはいつも必ず私を励ましてくれる。私にとって、心の中にある故郷は、かけがえのない存在なのである。
私の両親は、教員で共働きであった。その両親に代わり、父方の祖父母と母方の祖母の三人が、本当に愛情を注いで私を育ててくれた。寂しい思いもせず元気に成長できたのは、三人の祖父母の深い愛情と奮闘のお陰と、年を重ねる程に感謝と思慕の念が深くなる。
振り返ると、当時の大人達の多くは、地域や他人の為に出来ることを当たり前のようにしていた。時代なのか土地柄なのか、困った時はお互い様と助け合って暮らしていた。友や恩師にも恵まれた私は、どれほど多くの人々に助けられ支えられて、子供時代を過ごしたことだろう。
大分市に移り住んで四十年になるが、今もふるさとへの想いは尽きない。それは夫も同じようで、最近夫は頻繁に自分のふるさと立石に出かけていく。生家はとうになく、行き先は先祖が眠る墓地で

ある。小高い丘の上にある、少し広めのその墓地が自分の遊び場だと、楽しそうに墓掃除に出かける。夫は、ふるさとに会いに行っているのだろう。ふるさとは、特別な場所なのである。

一昨年の春、私は仕事を辞め、久方ぶりに専業主婦になった。今後は、地域の子供達の成長を見守り、若い世代の子育てのお手伝いをしていきたい。子供達の心の中に、温かいふるさとの記憶を残してやりたいのだ。それは一生の宝物となり、一人ひとりの人生を支える大きな力になると信じるからである。

「親と子」雑感

宮崎総合学院
18回生　植松　修一

親と子のあり方について、社会の縮図的構造をなすものとして、マスコミ等で取り上げられているのを、最近目にすることを多く感じます。切羽詰まるような子育ての状況から遠ざかり、孫育てには縁遠い環境のなかゆえに気付くのかも知れません。

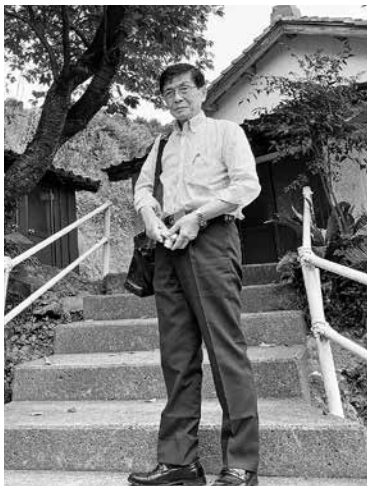
そこで、その内のいくつかをここにご紹介したいと思います。

［その一］ある県庁幹部が朝早く出勤して、勤務前に作業服を着て県庁前の通りを掃除していたときの光景だそうである。そこへ、小学生くらいの男の子を連れた母親が通りがかり、子どもに言った。「よく見ておきなさい。あなたもしっかりと勉強しないと、大きくなってあんな風になりますよ」

［その二］いつも仕事で忙しい父親が、珍しく早く帰宅して、中学生の息子と共にテレビを見ていた。その場で、母親がその子に次のように注意した。「いつまでもテレビを見ていないで勉強しなさい。そうでないと、お父さん程度にしかなれませんよ」

［その三］カーター元アメリカ大統領の母親の話。氏がまだ在任中のこと、ホワイトハウスを訪れた彼女に記者が、「あなたは、自分の息子を誇りに思っていますか？」と質問したところ、「どの息子のこと？」と、聞き返したそうである。大統領になった息子も、ならなかった息子も、母親にとっては同じ息子なのである。

［その四］両親と息子の三人で、頑固に昔ながらの製法を守っている豆腐屋の家族がいた。早朝四時に起きておいしい豆腐を作り、父親は天秤棒をかついで売りに出かけ、息子は自転車で売り回る毎日であった。



ある日、その息子が父の写真ということで一枚の写真を持ってきた。その写真を見ると、道路の上に天秤棒をわたした岡持が置いてあるだけで、「お父さんの写真」と言ったのに父親はどこにも写っていなかった。が、確かな存在が、そこにはあった。

古稀を目前に控えるなかで、自戒の念と忸怩たる思いを秘めながら物させていただきました。

本当に大切なこと

コンサルティング会社
代表取締役社長
31回生　後藤　賢吾

私は父親として考えさせられる話を先日聞きましたのでご紹介します。その方は経営者になり事業は順調でしたが、仕事ばかりしていました。奥様から少しは子どもとも接してほしいと言われ、なんとか日曜日に家に居るようにしたそうです。しかし、なぜか「お父さんみたいになりたくない」と家に居れば居るほど子供から言われるようになったそうです。あるときある方と知り合いになり、たまたま、子どもが夢や希望をなくす親のたったひと言があると言われたそうです。その言葉は、「疲れた」のひと言だそうです。勉強しなさい、塾に行きなさい、と言っていますが、その本質は、将来自分の力で自立して世の中に貢献し喜ばれる仕事をすることで、その収入をもって家庭を持って生活をするという、ことなのに、一番身近なお父さんが仕事を「疲れた」と言っていることが、仕事は「苦役」なのか「嫌なもの」なのかと矛盾を感じるとのことです。さらには、居間にゴロッと寝ていて、掃除機でつっつかれているのがお父さんかと思われ、また、奥様に無意識に仕事上の愚痴などを話していて、なにも良いところがない状態ため、当然「お父さんみたいになりたくない」になっていたことに気づきとても衝撃的だったということでした。本当は、一番身近で大切な子どもには、仕事ができ社会に貢献することができる有難さ、勤労を尊重し自立することの大切さを伝えたかったのに、無意識に逆のことをしてしまっていたことに気づいたそうです。「疲れた」と言わないこと、仕事は楽しい、素晴らしいってことを伝えるようにしたそうです。そうしたところ、子ども達は、明らかにいい方へ変ったそうです。その方は「疲れた」のたったひと言ですが、このことを知って気づいたことがとても大きい人生の転機になったとのことです。本当に大切なことは何なのか、を考えさせられる話でした。

同窓会のあり方について

楽天トラベル
32回生　長野　真一郎

大分大学経済学部の大学院修了者は皆さまご存知の通り「四極青雲会」に参加させていただいていますが、学部卒業者の会、「四極会」の中には年代別に部会があり、「昭平会」という60歳以下の会があります。

こちらには、私と櫛野誠治さんが院修了者として定期的に参加させていただいています。

しかしながら、この会に参加して思うことは、若い方の（20代・30代）参加率が特によくないということです。

企業別や地域別での「四極会」も行っているようですが、会報を見てもわかるように、若い方の参加が少ない気がしてなりません。

近年企業では、コンプライアンスやハラスメントを意識し、飲み会や任意の会合の出席を昔のように先輩からの半ば強引な参加要請ができなくなってきています。

個人の考えを尊重する風潮になってきています。

そうした傾向があるゆえに、企業での組合活動の弱体化など、若者が参加しなくなったことにより組織そのものが変化してきているのではないかと感じます。

なぜか、それは参加するにあたり年会費・月会費を徴収されるからといっても過言ではありません。会費に似合った会ではないから参加しないのだということが考えられます。

合理的に考えても、そこにお金を投資しても無駄だと考えることができます。

では、どうしたらこの会に若い方が参加してくれるようになるのか考えてみると、若者にとって参加したくなる魅力的な会になるような活動を行わない限り、今後の発展は望めないのは確かです。ますます参加率は悪くなり、会としての存続が難しくなることは言うまでもありません。

四極会は現役の学生のみが参加する会、定年退職した方が集まって楽しく過ごす会では、この会の存続が危ぶまれます。現状、若者にとって卒業したら用なしの会になっているのは確かです。

経済学部卒業生として、今後魅力的な会にできるよう改善を行っていかなければならないと感じています。一緒に改善していきましょう！

四極青雲会の参加者で60歳以下の方がいらっしゃいましたら、是非参加をお願いいたします。私宛にお声がけください。

最後に、櫛野誠治君が4月に結婚されるようです。おめでとうございます！お幸せに！

地方創生への問いと大学院での学び

経済学研究科博士後期課程在籍
株式会社大分放送 メディア局長
現役院生　松井　督治

私は1983年に株式会社大分放送に入社し、26年間、アナウンサー、報道キャスターとして県内のニュースをはじめ、様々な情報を伝えてきました。入社当時は、平松守彦前知事の「一村一品運動」が始まったばかりで、各地で元気に「地域起こし」に取り組んでいる多くの人たちを取材しました。

2009年に報道局に移り、日々のニュースや番組制作に携わる中で、県内ではかつての「地域づくり活動」は減速し、少子高齢化、過疎化が加速度的に進んでいる現状を目の当たりにして、強い危機感を覚えました。

そんな折、国は2015年から「地方創生」をスタートさせ、各自治体では「地方版総合戦略」に沿った施策が実施されましたが、地方の人口減少は止まらず、東京一極集中が続いていました。この時の「地方創生は、なぜ成果が出ないのか」という問いが、私が大学院で学ぶきっかけとなりました。

大学院では「地方創生の成果と課題～大分県市町村アンケート調査から」という修士論文に取り組みながら、「地域発展論」、「交通論」、「農村発展論」、「経済地理学」、「地域構造論」、「自治体経営論」、「地域政策論」、「ミクロ経済学」、「経営戦略論」、「ベンチャー・技術経営論」など、地域経済や地域経営についての知識を学ぶことができました。

これまで、県内の政治、行政、経済、産業、社会問題、医療、福祉・介護、文化、地域づくりなど、様々な分野のニュースを伝えてきましたが、日々起きる現象面だけでなく、その原因や背景について深く考えるための知識を得たことが、大学院2年間の大きな収穫でした。この学びは、現在担当しているOBSラジオ「NEWS WAVE」で、各界の方々へのインタビューの場面で、大いに役立てています。

今後も、少子高齢化、若者の流出など、人口減少が進む県内の地域経済、地域社会の課題解決に向けた研究を続けたいと考え、後期課程では「地域再生におけるメディアの役割」について調査を進めているところです。

令和元年度 四極青雲会 活動報告

第9回 四極青雲会総会・記念講演および懇親会

第9回四極青雲会総会関連が以下の開催要領にのっとり開催された。

【開催要領】日時：令和元年5月11日（土）、総会：午後5時30分から、記念講演：午後6時から、講師：日本銀行大分支店長　森毅氏　演題：「日本経済と大分県経済」懇親会：午後7時から、場所：大分センチュリーホテル2階、懇親会会費6千円（留学生に限り今回も無料招待）。

5月開催は初めてで大学の行事とも重なりはしたが、記念講演は金融関連（主に県内地方銀行）のオープン参加者も含めて51名と盛況でした。森支店長におかれましては、公務ご多忙のなか記念講演をご快諾いただき誠にありがとうございました。講演内容につきましては後記の要旨をご覧ください。

懇親会の参加者は大学、四極会、青雲会、講師の森支店長を含めて総勢45名でした。

【総会】平成30年度総会議事（報告・お願い）事項として、1．平成30年度活動報告および令和元年度活動方針（案）2．平成30年度決算および令和元年度予算（案）3．その他の報告およびお願い。

【平成30年度活動報告】

◆平成30年5月12日（土）第8回四極青雲会総会・記念講演および懇親会を開催

記念講演　広瀬勝貞氏（大分県知事）「県政に思うこと」

◆平成30年8月29日（土）

第15回四極青雲会定例会を「イノベーティブ経済セミナー」として大学と共同開催

講演　桑野和泉氏（由布院温泉観光協会会長）「由布院の観光まちづくり」

◆平成30年11月～平成31年1月にかけての課題研究のサポート

現役の院生と合同で受講／新規受講生の動員など

◆平成31年1月26日（土）

第16回四極青雲会定例会を「イノベーティブ経済セミナー」として大学と共同開催

講演　湯淺豊生氏（大分大学経済学部教授）

「我が国の所得税における包括的所得概念の展開」

◆平成31年3月下旬　会報「青雲」第八号発刊

【令和元年度活動方針（案）】

◆30年度に引き続き以下の活動をおこなう。

1．総会／年1回（4～5月中）2．定例会／年2回　3．会報発行／年1回（第八号）4．その他、講演会・シンポジウム・小旅行・ゴルフ会など要望にそって企画する。

◆組織強化のため会員名簿の整理と拡充（特に外国籍の同窓生）に努める。

◆財政の安定化にむけて、入会金・年会費の納入者を増やす。

◆研究科と連携を強化する。（院入学希望者の勧誘／各セミナーへの参加と動員）

【その他のご報告とお願い】

◆四極会のＨＰの刷新に伴い組織活性化のための情報提供のお願い。

◆四極会活動に積極的に協力すること

1．母校100周年記念事業（100周年記念募金・各種記念行事）2．各支部行事への参加（支部総会・趣味の会・世代間交流会のイベントなど）

具体的には概ね以上である。決算報告も含めてすべて承認された。（決算報告は紙面の都合で割愛）。

（32回生　事務局　岩尾　明　記）

記念講演の要旨

演題「日本経済と大分県経済」

講師：日本銀行大分支店長

森毅氏

講師の森支店長は、昭和44年生まれ東京都出身で、平成5年3月東大法卒、同年4月日本銀行入行。ワシントン事務所長、発券局総務課長を歴任し、平成30年6月大分支店長として着任されました。

演題のとおり、今回は「日本経済」と「大分県経済」の2本柱の構成で、まずは最近の日本経済の大きな動向についての解説を通して日本経済全体を俯瞰し、次に大分県経済の最新の経済指標について解説後、「労働生産性の向上」と「域内需要の拡大」という二つの切り口で、大分県が抱える課題や向かうべき方向性を示していくという講演内容でした。

まず、「日本経済」について、実質ＧＤＰはリーマンショック後の460兆円を底に緩やかな拡大基調で、2018年には540兆円に迫っており、決して悪い状況ではないとのことでした。前回の長期回復局面（2002年2月～2008年2月）と今回の回復局面（2012年12月～）を比べると、前回は輸出、特に財の伸びが大きく寄与する一方、設備投資がマイナス

でしたが、今回は輸出（財、サービス）、設備投資（機械等、建物・構築物）のいずれもプラスでバランスよく推移。ＩＭＦ世界経済見通しは当面３・６％水準（先進国１・７％、新興国・途上国４・８～４・９％）、国内個人消費（消費活動指数）は２０１１年対比で順調に増加基調、日本銀行の金融政策運営は「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」政策を２０１６年９月より継続中で「オーバーシュート型コミットメント」（物価上昇率目標２％）および「イールドカーブ・コントロール」（短期政策金利マイナスかつ長期金利操作目標ゼロ％程度）といったいくつかのテーマについて解説がありました。

続いて、「大分県経済」について、２０１９年４月の地域別景気判断において東北、北陸、九州・沖縄の３地区のみ景気が下向きで、要因に関しては加工業を中心に中国経済の影響を受けた結果となっていますが、３月短観（大分支店）をみると電気機械、輸送用機械ともに12月→３月の変化幅は±０と、大分の場合は九州全体の動向とは異なる動きとなっています。大分県経済の大きな課題認識として、全国を上回るペースで人口減少が進んでいるとの指摘がありました。人口減少に対する対応において、「人口流出減」→「自然増」へのアプローチの流れの中で、特に鍵を握る「労働生産性の向上」と「域内需要の拡大」の２つのテーマについて掘り下げた解説がありました。

「労働生産性の向上」に関して、社会増減率と賃金水準には相関関係があり、大分県からは地域別では福岡と東京、業種別では医療・福祉、情報通信、サービス、卸・小売などへの転出超過が顕著であるというデータの紹介があり、大分県の賃金格差の要因分析の結果、非製造業の労働生産性の引上げが課題であることを示されました。また、労働生産性の地域間格差の要因分解に基づく大分県の特徴として、「資本の投入」や「労働の質向上」ではなく、「ＴＦＰ（全要素生産性）」の引上げによって労働生産性を上昇させる余地があり、工学的な技術革新に加え、新しいビジネスモデルやノウハウの導入による「業務の改善」に取り組むことが求められるということでした。具体的な戦略として、「ビジネス・プロセスの見直し」、「価格差別化戦略」、「非価格戦略」、「ポジショニング戦略」といった４つの戦略を挙げ、県内企業事例とともに各戦略の内容について紹介がありました。

「域内需要の拡大」では、「ラグビーワールドカップ２０１９大分開催」による経済効果が期待されるなか、温泉や食事以外の自然景観や文化的名所等の観光資源の訴求力を高めることで、潜在的な観光需要の開拓の余地があるということでした。特に、欧米豪の海外旅行者は「温泉入浴」のニーズが低く、「自然・景勝地観光」や「日本の歴史・伝統文化体験」に関心が高いということを念頭に入れて、新たなターゲットの開拓をする必要があるとのことです。また、インバウンド需要を取り込むには、キャッシュレスの普及が求められていることについて、アジアからの訪日外国人旅行者へのアンケート調査結果を根拠に指摘がありました。

最後に、「豊富な観光資源」、「九州第２位の製造品出荷額」、「全国ブランドの魚介類・農産物」、「海洋交通の要衝」、「ダイバーシティ社会」といった大分県経済の強みを活かして、全国を上回るペースの人口減少問題に立ち向かっていくことに対しての期待を込めて、森支店長自らが大分県内を足で回るなかで思いついた新たな観光ルートのアイデアをいくつか披露していただき、講演を締めくくられました。

（36回生　甲斐健文　記）

大分大学大学院 経済学研究科
四極青雲会 総会
2019/05/11

第17回四極青雲会定例会
―イノベーティブ経済セミナー として大分大学と共催―
―私の地方創生―

開催日時　令和元年9月7日（土）17：30～
場　所　J：COMホルトホール大分　2階サテライトキャンパスおおいた講義室
演　題　「私の地方創生」
講　師　別府市長　長野恭紘
参加者　青雲会会員　四極会会員　現役院生　大学関係者　45名
講　演　別府市長　長野恭紘「別府市が掲げる地方創生」

私たちが一番大切にしていること、それは「沸く沸く、ドキドキ、感動のまちづくり!!」ということです。別府にいて楽しい、別府に行けば何かが起こるのではないかという期待感がないと、住む人も訪れる人も楽しくないと思います。「沸く沸く、ドキドキ」を常に意識して様々な施策に取り組んでいます。

そして私たちは「観光振興」と「地域振興」とを常に意識しています。私たちは「地域振興」のために仕事をしています。つまり、市民の皆さんが幸せであり、この街が一番だと言ってもらえる街をつくっていくことが常に目的にあるということです。そのための手段として「観光振興」があると思っています。観光地なのでお客様に多く来ていただくことは大事です。しかし、お客様を増やすことが目的になり、その結果、市民の皆さんが住みづらくなるようなことは本末転倒です。

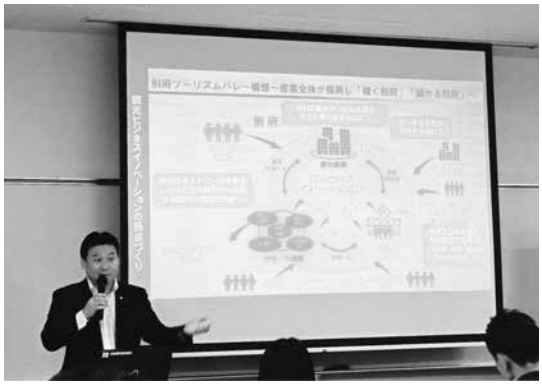
「観光」と「市民」が乖離せず一体となったまちづくりが大事であり、その取り組み例が「湯～園地」や「湯ぶっかけまつり」です。

「湯～園地」では、別府市に昔から市民の身近にあった遊園地と温泉とを掛け合させて、斬新な「湯～園地」を創りました。これは、ちょっと見方を変えることで昔からある「宝」を再認識し、市民の誇り・自慢の醸成を目的として実施しました。

「湯ぶっかけまつり」も温泉の量を30倍、60倍と、今までは考えられない量を使い、参加する市民が「さすが別府市！」と思う盛り上がりを見せています。今ではツアーを組んだ観光客も増えてきています。

このように、まずは「地域振興」、それが「観光振興」につながっていくという、2つが混ざり合い良い循環を生み出すことが大事です。

2期目の長野市政では3つの大きな柱を掲げています。「新図書館の一体的整備」「東洋のブルーラグーン構想」「別府ツーリズムバレー構想」です。どれも、今ある宝を活かし、別府の歴史・伝統・産業・文化を徹底的に磨き上げ、さらにすばらしい別府の未来を創り出す地方創生の取り組みです。



市民一人一人の幸せが私たちのゴールです。目的を見誤らないように全ての施策が市民の幸せのどこにつながっていくか常に答え合わせをしながら、これからも地方創生に取り組んでまいります。

第18回四極青雲会定例会
― イノベーティブ経済セミナー として大分大学と共催 ―
―フランス労働法改革と日本の働き方改革の比較考察―

開催日時　令和2年1月25日（土）17：00～
場　所　J：COMホルト ホール大分　2階 サテライトキャンパスおおいた講義室
演　題　「フランス労働法改革と日本の働き方改革の比較考察」
講　師　大分大学経済学部 准教授　小山　敬晴
参加者　青雲会会員　四極会会員　現役院生　大学関係者　28名

今回のセミナーは、毎年恒例の1月の開催でしたが、比較的暖かな一日でした。

本年は、お正月も穏やかで、季節を通して暖かく、暖冬傾向のようであります。

会場は、席が埋まる盛況ぶりでした。

講演に先立ち、司会は市原教授が務められ、そして、木本青雲会会長が挨拶を行いました。

講師である小山准教授は赴任して3年目で、以前は早稲田大学の方にいらしたとのことです。

講演は、まず、産業がデジタル化へと進んでいる関係で労働雇用が変容している可能性があると変化の潮流を述べられ、日本において平成30年6月、「働き方改革推進整備法」が成立し、中小企業等一部を除いて、この4月から施行される「働き方改革」について、フランスで現在進められている労働法改革と相対的に観察して、日本の「働き方改革」が労働法規制を強めたものとなったのかどうかを問う展開で進められました。

まず、フランスで進められている労働改革が、2016年、オランド大統領の時代に開始され、2017年マクロン大統領によりさらに一連の改革が進められているとの時代経過であるが、労働改革は、フランスに限らずイギリス、スペイン、ドイツ等でも進められており、世界的な政治課題として取り組まれていることのようです。

フランスの暦的経過をもう少し詳しくみると、

①2016年8月　オランド大統領政権下で「エリコム法」が制定された。

②マクロン改革「第1幕」
2017年　オルナンドス
⇩　基本的に規制緩和

③マクロン改革「第2幕」
2019年　職業訓練・失業保険改革

④「第3幕」　年金改革

として、このような改革に対して、皆さんもご存じのように、幾度となく激しい労働者のストや反対運動がニュースでも報道されてきております。

その中でも注目を浴びているのは、年金改革で、国立バレー団員は現在40歳過ぎから年金を受給できる仕組みになっており、それらの受給年齢を引き上げる施策を進めているとのことです。

次に、実際の日本の労働時間とフランスの労働時間を比較してみると、日本が年間1998時間（2018年度）であるのに対して、フランスは1679時間と、日本の方が約320時間も多い数字となっています。また、主要国で一人当たりの平均年間総実労時間の比較においても日本は総じて労働時間が多いというデーターが示されています。

そして、労働時間と労働生産性の比較をみてみても、日本の労働生産性は世界的にも20位前後で、決して高いとは言えません。

皆さんからしてみると、経済大国の仲間入りしている日本であるからに、その労働生産性は高いであろうと予想していた人が多いのではないかと推察しますが、実際はそうではないということです。結局、日本は労働時間が多すぎるということによる反映であるようです。

そこで、日本の「働き方改革」は次のとおりであることが述べられた。

目的→生産性の向上―長時間労働を是正し、生産性を向上させる。

手段

①長時間労働の是正
②同一労働同一賃金
③自由で柔軟な働き方の推進

これに対し、フランスの労働改革の推進内容としては、法律主義中心だったフランスにおいて労働法規範の逆転が起きていることが指摘されました。

①法律中心主義のフランスにおいて、法律と企業協定の地位が逆転
②産別労働協約の影響が強いフランスにおいて産別協約と企業協定の地位が逆転
③個人主義＝契約絶対主義のフランスにおいて、労働契約と企業協定の地位が逆転

このように、個別合意なしに労働条件の不利益を可能とする仕組みに変わっていっているということであるらしい。

結局は、労働条件を法規範によらず「労使対話による合意」により決めていくこと！

労使対話の促進です。

しかし、背景として、低成長時代、労働条件の悪化、組合の弱体化が進む時代で、どのよう

な結論になるのかの推測は容易でないことのようです。

これに対して、日本では既に就業規則による不利益変更の法理があり、平等という厳格な法に基づく判断はなく、労使が合意しておれば、格差も容認するという傾向のようであること等も述べられました。

そして、結論として

①フランス―規制緩和―労使対話によるルール設定へ

②日本―労働時間規制強化―もともと労使対話か一方的決定であるとして、日本におけるー労働法の本来的課題が

①実質的で良好な労使関係をいかに作るか

②利益相反する労働者同士のコミュニケーションをいかに図るかと

という定義で、講演を終えられました。

その後、質問の時間が設けられ活発な質疑応答がなされました。

講演テーマとしては、今多くの企業として関心事である「働き方改革」の進め方については法に従いながらも、どう進めていったら良いのかと、まさに暗中模索ではないでしょうか。

それだけに、非常な興味深いテーマとしての講演でありました。

おわりに、青雲会の岩尾事務局長から謝辞と事務連絡がなされました。

小山准教授大変ありがとうございました。

そして、大分大学の先生方、関係者の皆さん　ありがとうございました。

終了後、講義室横の空間で参加者一同で記念写真を撮りました。

また、その後場所を変え、有志で懇親会を実施しました。

（場所：ＪＲ九州ブロッサム大分　８階　レストラン）

楽しいひとときで、懇親も深まりました。有意義な時間をありがとうございました。

今回、ご参加いただいた皆さん大変お疲れさまでした。

そして、ありがとうございました。

行政書士堀総合法務事務所代表
33回生　堀　誠

大分大学大学院経済学研究科 記念すべき令和元年度 ご入学の皆様の紹介

新院生の皆様、ご入学おめでとうございます。四極（しはす）青雲会は大分大学大学院経済学研究科の同窓会です。当研究科の院生は年齢、職業、出身大学、専門領域、国籍など実にさまざまで、原則2年間という限られた時間でのつき合いになります。

そこで誰でも参加でき楽しい意義のある永続的な交流の場が欲しいという有志の熱意と情熱から、2010（平成22）年4月に大分大学大学院経済学研究科同窓会四極（しはす）青雲会が設立されました。現役院生にも参加資格が認められている極めて稀な大学院の同窓会です。セミナーと親睦会を組み合わせた異業種交流会さながらの活動が中心です。座学も然ることながら、多士済々の同窓生同士で交流を深め、意義ある院生時代を送られれば何よりに存じます。新たなファイトを燃やして積極的に活動の輪に加わってください。きっと何か新しい発見があると確信しています。四極青雲会は皆様のご入学を心より歓迎します。大いに交流を深めましょう。

【新院生のご紹介】

2019年博士前期課程春季8名　高橋 郁己（経済史／市原ゼミ）、任 雪銘（社会政策論／石井ゼミ）、甲斐 浩一郎（マーケティング論／松隈ゼミ）、聞天楽（経営情報論／松岡ゼミ）、矢野 俊樹（マーケティング論／松隈ゼミ）、姚 旭東（経営戦略論／仲本ゼミ）、李 天一（比較経営史／渡邊ゼミ）、劉 勝男（比較経営史／渡邊ゼミ）。

2019年博士前期課程秋期8名　王 佩萱（経済史／市原ゼミ）、金 韓起（経済史／市原ゼミ）、付 宇佳（社会政策論／石井ゼミ）、于 悦（地域発展論／宮町ゼミ）、相澤 隆明（マーケティング論／松隈ゼミ）、王 妍方（経営戦略論／仲本ゼミ）、朱 亜青（比較経営史／渡邊ゼミ）、李 妍妍（比較経営史／渡邊ゼミ）。

2019年博士後期課程1名　松井 督治（地域産業構造論／宮町ゼミ）。

以上の17名の方々がご入学です。

（32回生　事務局　岩尾　明　記）

大分大学経済学部 創立100周年に向けて募金にご協力を

○記念事業計画

100周年まであと2年。1922年に大分高等商業学校として呱々の声を上げて以来、大正、昭和、平成、令和に亘って1万2千余人の学生が多感な学生時代を過ごした経済学部は2022年（令和4年）に100周年を迎えます。大学院経済学研究科ができた1977年からは45年になります。6月25日の記念式典に向けて、経済学部と四極会が共同で組織した記念事業実行委員会を中心に事業計画も煮詰まってきました。

既に実施中の事業として、四極会ホームページのリニューアル（2019年4月）、プレイベントと位置付けた芸術文化祭「自遊展」の開催（2018年度より）、大分合同新聞への見開き全面広告の掲載（2019年9月）等があります。自遊展では地域イノベーション学科の渡邊ゼミ学生による、市民を巻き込んだ「大分の歌音楽祭」も始まりました。

今後は黒土記念講堂の整備（2020年10月予定）、連続公開講座・経済トップセミナーの

記念事業

事業	時期
プレイベント（自遊展）	2018年度～
高校生なるほどアイディアコンテスト支援	2018年度～
四極会ホームページのリニューアル	2019年4月
黒土始記念講堂の整備	2020年10月
四極会談話室及びアーカイブルームの整備	2021年度
市民講座の開催	2022年
100周年記念式典	2022年6月25日
記念ツアー実施	2022年6月
記念誌の発行	2023年度
記念ビデオの作成	2023年度
経済学部内庭整備	2023年度

開催、100周年記念誌の発行、卒業生がいつでも集まることのできるアーカイブルームの設置等が計画されています。記念式典の前後には、久しぶりに大分に帰ってくる卒業生のために旦野原キャンパスや県内の国宝をめぐる記念ツアーも実施します。

○記念募金の目標と現状

これらの事業は募金で賄う必要があります。そのため、実行委員会に設置された募金小委員会を中心に、2018年7月から卒業生に募金をお願いしてきました。募金は四極会または大分大学の口座にお振込みいただく方法でお願いしています。目標は個人1億円、法人3千万円の合わせて1億3千万円。

2020年2月末現在、卒業生の皆さんから寄せられた個人募金は4184万円。まだまだ目標額からは遠い金額です。個人募金1億円は、1万人の卒業生に1万円をかけて算出した金額です。もしかすると、2022年はまだ先の事だからとゆったり構えている方もいるかもしれません。しかし事業遂行の上からは早めに募金額が固まる必要がありますので、2019年度内に個人7割の目標を掲げて募金活動を行ってきたところです。

○支部別募金状況

目標額は各地に45ある支部別に設定しました。大分銀行支部、豊和銀行支部、北九州支部、大分合同新聞支部など既に100%達成した支部、広島支部、大分大学支部、別府支部など目標にあと一歩の支部、まだこれから本腰をいれて取り組む支部と様々です。各支部に属する青雲会の皆様からは、15人、134万円の募金をいただいています。これからの募金をお考えの方、ぜひ早めのご協力をお願いいたします。

（四極会事務局）

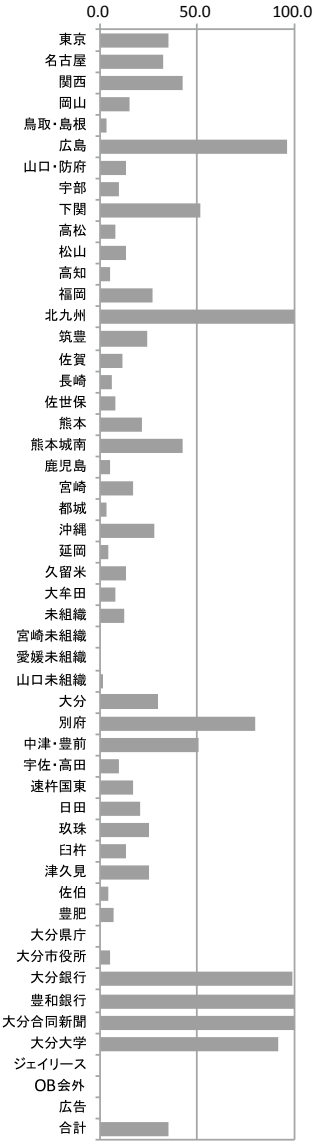
支部別募金状況　令和２年１月末現在

単位：万円、%

支部名	目標	実績	目標達成率
東京	1,099	382.6	34.8
名古屋	131	42.1	32.1
関西	544	232.1	42.7
岡山	110	16.5	15.0
鳥取・島根	85	3.0	3.5
広島	159	153.6	96.6
山口・防府	46	6.0	13.0
宇部	51	5.0	9.8
下関	79	41.1	52.0
高松	39	3.0	7.7
松山	93	12.0	12.9
高知	19	1.0	5.3
福岡	658	177.6	27.0
北九州	368	815.4	221.6
筑豊	80	19.5	24.4
佐賀	167	18.5	11.1
長崎	407	26.0	6.4
佐世保	119	9.1	7.6
熊本	356	76.2	21.4
熊本城南	49	21.0	42.9
鹿児島	237	12.0	5.1
宮崎	395	67.2	17.0
都城	55	2.0	3.6
沖縄	40	11.0	27.5
延岡	94	4.0	4.3
久留米	174	22.5	12.9
大牟田	38	3.0	7.9
未組織	96	12.0	12.5
宮崎未組織	121	0.0	0.0
愛媛未組織	193	0.0	0.0
山口未組織	58	1.0	1.7
大分	2,230	655.2	29.4
別府	468	374.3	80.0
中津・豊前	159	80.0	50.3
宇佐・高田	150	14.0	9.3
速杵国東	238	39.5	16.6
日田	74	15.0	20.3
玖珠	56	14.0	25.0
臼杵	146	19.0	13.0
津久見	36	9.0	25.0
佐伯	136	6.3	4.6
豊肥	176	13.0	7.4
大分県庁	186	0.0	0.0
大分市役所	133	6.7	5.0
大分銀行	219	217.0	99.1
豊和銀行	68	68.0	100.0
大分合同新聞	28	30.0	107.1
大分大学	24	22.0	91.7
ジェイリース	9	0.0	0.0
OB 会外	…	12.2	…
広告	…	318.6	…
合計	10,696	3,791.2	35.4

注）大分大学口座への入金を除く

達成率（%）



編集雑感

元号が変わり、令和となりました。

本年度、会報誌に、ご投稿いただいた皆様方には感謝申し上げます。

また、事務局長他同窓のためにご尽力いただいている皆様にも感謝申し上げます。おかげ様で会報の軌跡としての道がずっと続いております。ありがとうございます。

本年の冬は、とても暖かですね。異常気象？地球温暖化の影響でしょうか？

日本は温帯モンスーン気候地帯に属し、四季があります。四季による季節を感じ、風情が独特な文化を紡いできた歴史があります。

しかし、私の主観かもしれませんが、温暖化の影響で、春秋の期間が短くなり、夏が長くなっているような気がします。しかも、夏の暑さが異常で、以前では感じることが出来なかった猛暑、酷暑となっています。

私たちが過ごした若かりし頃の時代は、30度を超えることはほとんどなかったと記憶しております。そして、エアーコンディショナーがある家も少なかったように思います。今や必需品ですが・・・・・。

今の夏の気温は、生存にかかわる温度に達して来ているのではないでしょうか。

天気予報で、エアコン使用の奨励、運動禁止、外出禁止までいわれています。私は野球の審判をしており、夏がシーズンなので、暑さが厳しくなったのはこたえております。

地球温暖化は環境破壊や、自然体系に大きな変化をもたらしてきているようですね。

南北極、寒冷地域の氷河や永久凍土の減少、海水面の上昇、魚の漁獲の変異、その他動植物の生息区域の変異、そして、日本においてここ毎年続く、局地的豪雨等の被害や、つい最近では、多くの動物の生命を奪ったオーストラリアの大規模山火事は真新しいニュースとして皆さんも少なからず心を痛められたのではないでしょうか。

確かに今の子供の世代、子孫のためにも地球温暖化防止の取組を急がなければ、地球環境は悪くなるばかりで、人間の生存変異も生じるかもしれません。

既に、エネルギー問題では、再生可能エネルギーへの転換についても強く進められていますが、ソーラーの大量設置は、山林の伐採等逆に環境破壊の面があるような気もしてちょっと残念です。

スウェーデンの環境活動家のグレタ・トゥンベリさんは、まだ10代ですが、全世界的に環境活動をされています。

人間の生活を豊かにする経済の発展との兼ね合い等も踏まえれば、エネルギー問題、環境保全等、本当に難しいことですが、やはり一人一人の意識による環境保全への取組が基本となることは間違いないので、必要とされる小さな活動を積み重ねていくしかないのではないでしょうか。

話は変わりますが、昨年はラグビーワールドカップが日本で開催され、大分では5試合も実施され、世界最高峰の試合を直接見る幸運に恵まれました。

また、多くの外国のお客様が訪れ、国際交流が行われ、経済効果大きかったのではないかと想像します。

私は2試合だけでしたが、スタジアムの案内係等でボランティアとして関われたのも幸運でした。加えて、丁度、ニュージーランド戦で、生ハカを直接垣間見ることもできました。

日本チームの活躍に、日本中が沸き立ち、多くの人たちがラグビーというスポーツの素晴らしさを改めて感じることが出来たのではないでしょうか。One Team を合言葉に、将にラグビーイヤーでした。

本年は、日本にとってはオリピック・パラリンピックイヤーです。開催が夏真っ盛りの時期になり暑さが気がかりですが、平和の祭典、オリンピックの日本での開催を一生に二度経験できるとは思いもしませんでした。私は専らテレビ観戦ですが、非常に楽しみです。

大分県出身選手にも期待したいものです。

いま、世界の情勢は、混乱と混沌の中にあります。グローバリズムが一転してナショナリズムになり、自由貿易から保護貿易、世界各地でのポピュリズムの台頭。

しかし、情報関係はより発展を遂げ、4Gから5Gへ、AI（人工知能）の活用等進化して来ておりますが、アナログとしての人間の思考、肉体の維持等は大切にしていかないと人間そのものの存在を否定してしまうことになります。

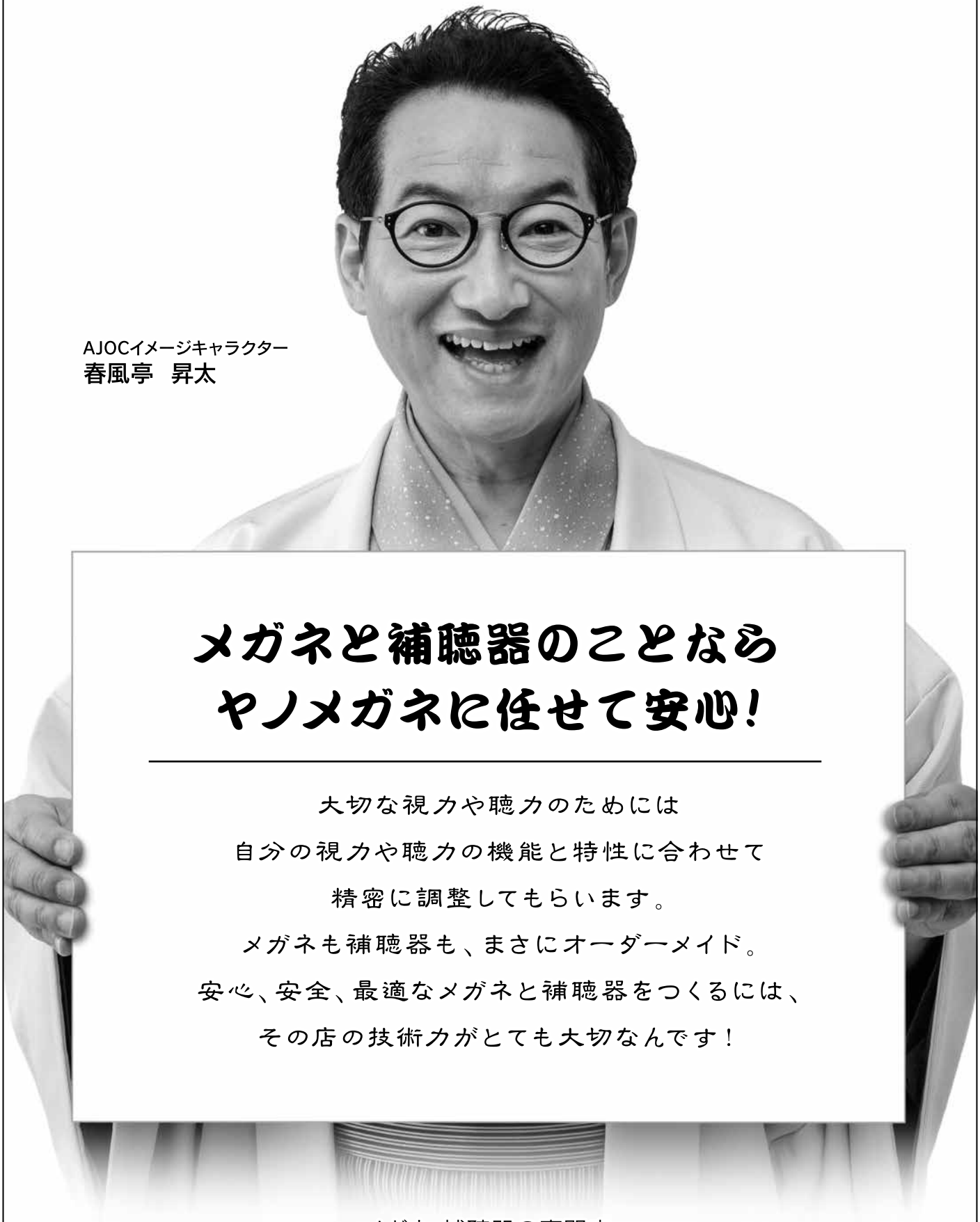
オリンピックは人間の頭脳と肉体とのバランスによる人間性を研ぎ澄ませた表現の場であると思われます。そのパフォーマンスの美しさ、人に与える感動をじっくりと味わいたいものです。

最後に、今始まった「令和」の時代が、平成の時代と同じように戦争のない平和な時代であることを期待しております。

次回の会報発行に際しても多くの皆様方の投稿をお待ちしております。

四極青雲会を今後ともよろしくお願いいたします。

会報編集者　33回生　堀　誠



メガネと補聴器のことなら
ヤノメガネに任せて安心!

大切な視力や聴力のためには
自分の視力や聴力の機能と特性に合わせて
精密に調整してもらいます。
メガネも補聴器も、まさにオーダーメイド。
安心、安全、最適なメガネと補聴器をつくるには、
その店の技術力がとても大切なんです!

メガネ・補聴器の専門店

ヤノメガネ

www.yanomegane.jp

大分テクノサポート協同組合
（外国人技能実習生管理団体）

<コラム>　実習生体験談

【中国人実習生 A さん】

ある日曜日に目的地までの道のりを、道行く日本人の人達に尋ねたところ、とても親切に教えてくれました。合計で 3 人の人に聞きましたが皆さん優しく教えてくれました。自分のスマホのナビを使って調べてくれる人もいて、嬉しかったです。自分が言った事が伝わったのは大きな進歩だと思いますが、教えてくれた日本人の人達の日本語が理解できなかったのでもっと勉強しようと思います。次はもっと意思疎通が日本語でできるようになりたいです。

【フィリピン人実習生 B さん】

毎朝の挨拶でみんな笑顔になり、それがきっかけでお互いの生活の事などを話すきっかけになるので、挨拶の力はすごいなと実感します。また、仕事で成果を出す事で、日本人リーダーが頑張りを認めてくれるのでとても嬉しいです。仕事が上手くできない時はリーダーが必ずお手本を見せてくれます。それでも上手くいかない時は、時々悔しくて泣きそうになる事もありますが、フィリピンにいる家族も私をサポートしてくれているので、自分のためだけではなく家族のためにも仕事も日本語学習も頑張りたいです。

【日本人職員 C】

一緒にゴミ分別の事前練習を行いましたが、実習生みんなどんな事も素直に学ぶ姿勢をとっていました。日本語の学習だけでなく、日本で生活するための法律の知識や常識など覚えないといけない事は山ほどあります。そのため、ぱっと出る言葉が母国語になってしまう事が多いですが、今の学習に対する素直な姿勢を忘れず日本の文化を身につけてくれると良いなと感じました。

組合員様の事業の成長と国際貢献（人づくり）をサポートします。
母国語通訳による充実の 24 時間サポート体制が整っています。
（ 中国語 ・ ベトナム語 ・ 英語 ）
お気軽にご相談下さい。
大分テクノサポート協同組合
TEL：097-532-7339　/　FAX：097-529-7938

当組合での授業風景

<組合概要・沿革>

外国人技能実習制度の目的・種子は、開発途上地域等へ、わが国で培われた技能、技術または知識の移転を図り、当該開発途上地域等の経済発展を担う「人づくり」に寄与するという、国際協力の推進です。一般的に受け入れ可能職種に該当する企業様は、当組合を通じて技能実習生を受け入れることができます。

大分テクノサポート協同組合一同

当組合は外国人技能実習制度のもと、組合員様のために外国人技能実習生の受入れを行う監理団体です。

理事長を務める江 丹(大学院経済経営研究科 32 回)は、学生時代から当組合の仕事に通訳として関わってきました。通訳という仕事をする中で、言葉を変換する難しさや生活や文化の習慣の違いなど様々な問題に直面してきました。その中で、人との交流の大切さや国と国を繋ぐ仕事の魅力を知り、大学時代は外国人技能実習生に関する内容の卒業論文を執筆しました。卒業後も大分テクノサポートの仕事を継続し、現在では大分大学の卒業生を始めとする若いスタッフ計 11 名が在籍しています。 外国人技能実習生の受入が全国的にも広がる一方で、組合として様々なトラブルや事件などに柔軟に対処していく重要な役割があります。当組合がこれまでに培ったノウハウを活かし、来日する技能実習生達に充実した実習生活を送っていただけるよう尽力していきたいと思います。

当組合の技能実習生達

大分県議会議員

ごとう慎太郎

声なき声を県政に 小さな声を県政に

誰もが安心して暮らせる大分県であることは、県民みんなの願いです。この願いを実現するために、常に皆さまの声を拾い続けることが私は大切だと考えています。
私は特に、下記9項目に注力をそそぐ思いです。

1. 農 業

大分県の農業・農地農業従事者に関わる問題解決など

2. 道 路

大分外郭環状道路と鶴崎大南線の早期整備など

3. 防 災

地域防災力強化の為の河川の浚渫(しゅんせつ)促進など

4. 子 育 て

子供と親を社会全体で支える環境整備と支援など

5. 労 働 力

労働を支える外国人に選ばれる大分県になるための施策提案など

6. 人材育成

中学生・高校生への産業教育の充実と県内企業への就業確保など

7. 人 権

社会的マイノリティへサポート体制の拡充など（性的少数者・貧困家庭・障がい者・いじめ・不登校等）

8. 介 護

認知症を支える地域包括ケアシステムの構築など

9. 動物愛護

人と動物が共生する社会の推進など

●県議会議員**ごとう慎太郎**
1975年生まれ（45歳）
大分大学大学院経済学研究科卒　2015年から県議会議員として大分県行政に携わる
現在、県議会議員2期目

農業の価値とは

思想家の内田樹氏はこう述べています。「農業の存在意義を明確にすることが重要である。なぜなら、農業の存在意義はただ一つ、人々を**飢え死にさせないこと**であるからだ。農業問題を考えるときには、すべてこの**飢餓**をベースにおいて考えなければならず、人々を飢えさせないために、政治はどうあるべきか、何をすべきか、制度はどう設計されるべきかだ」と主張し、続けて、「食料としての農作物は**本質的には商品ではない**と言うことを国民に訴えること、理解してもらうことが大事だ。平時には普通の商品のように見えるが、一旦有事となると、商品としての性格は吹っ飛んで**それがないと飢え死にする**と言う究極の必需財と言う本当の姿を見せる。だからまずそのことを国民が理解し合意することが大事なのだ。」と言っています。
今の日本の農業と農村は深刻な高齢化・過疎化問題を抱え、地域福祉・高齢者福祉などの問題とも複雑に絡み合って、ますます深刻化しています。
食料自給率の低下、**食生活の変化**、**食品への不安や不信感**、**農家戸数や農業人口の減少**、**農業労働力の高齢化**、**農地の減少**、**耕作放棄地の増加**などの問題があります。
果たして、衰退の一途をたどるわが国の農業と農村、そしてそれらが抱える問題を解決できるような有効な手段や政策はあるのだろうか。
私はこれからの農業を考えるときには、こうした現実をしっかりと踏まえた上で、農業とは何を示すのかについて、国民はもとより、県民が理解できる議論をしっかりと行っていく必要があると考えます。（R1.9.26 一般質問冒頭内容抜粋）

平成31年第1回定例会　一般質問内容

- 性的少数者に対する取組について
- 子ども食堂について
- おおいた動物愛護センターについて
- 認知症施策について
- 教育現場の労働環境整備について

令和元年第1回定例会　一般質問内容

- 認知症施策の推進について
- 大分市東部地域の交通について
- 大分県農業の将来について

県政に関わる皆さまのご意見をお気軽にお聞かせください。

ごとう慎太郎事務所
TEL:097-547-7885　FAX:097-547-7887
gotou.shintarou@camei.plala.or.jp

全 647 室
九州最大級の
アミューズメント
ホテル

九州・別府
杉乃井ホテル

ご宿泊の予約・お問い合わせは 予約センター TEL 0977-78-8888

無料送迎バス運行中　別府駅（西口）⇔ 杉乃井ホテル　　大分県別府市観海寺1 TEL0977-24-1141㈹

令和二年三月発行